

朴敬玉著

『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』

御茶の水書房 2015年 ix+227 ページ

李 海 訓<sup>りかいくん</sup>

はじめに

日本植民地研究会から刊行された『日本植民地研究の現状と課題』の中で、山本裕は、「満州」<sup>(注1)</sup>・中国東北に関する歴史研究分野において、「外国名」研究者が新たな担い手として登場していると指摘している[山本2008]。本書も「外国名」研究者による中国東北に関する歴史研究であるが、特に「朝鮮人」、「農業」に焦点を当てており、著者の博士學位論文を加筆修正したものである。管見の限り、日本における、中国東北の「朝鮮人」と「農業」両方をキーワードにした本格的な研究書としては、本書が第1冊目である。

以下では、本書の概要を紹介する。

I 本書の概要

本書の構成は以下の通りである。

序 章

第1部 1920年代までの朝鮮人移民の増加と水田開発

第1章 1910～1920年代、中国東北地域における移民の増加

第2章 朝鮮人移民の移住にともなう稲作農業の展開

第3章 農民層の社会的分化と営農実態

第2部 満洲事変以降、北満地域における稲作農業の展開

第4章 満洲国前期の米穀政策と米生産の実態

第5章 満洲国成立以降、朝鮮人移民政策と移住の実態

第6章 満洲国における「安全農村」の建設と朝鮮人農民——濱江省珠河県河東村を中心に——

第7章 北満における稲作及び畑作経営——『北安省海倫県瑞穂村調査報告』における事例の検討——

終 章

序章では、課題と筆者の問題意識が提示される。本論は2部構成になっているが、第1部では、1920年代までの時期を対象にしており、第2部では満洲事変以降の時期、すなわち1930年代を対象としている。第1部では「朝鮮人移民の増加と水田開発」について、南満、中満、北満に分類された形で議論され、そこで1920年代後半から北満への移住者が増えたことを指摘する。第2部では、議論の対象を北満に絞っていく。そして、前半の2つの章では1930年代における満洲国の米穀政策と移民政策が検討され、後半の2つの章では北満の2つの農村を事例として取り上げ、朝鮮人移住と農業経営について検討する。終章は全体のまとめである。

「本書の課題は、1920年代から30年代にかけての中国東北地域における水田耕作の展開について、朝鮮人移民の移動・定住の過程との関連を中心に実証分析を行うことにより、朝鮮人移民を取り巻く社会状況と生活の実態を明らかにすることである。また、朝鮮人移民と稲作に対する日本の政策への考察を通じて、近代中国東北地域に対する日本の勢力拡張と支配の特徴を浮き彫りにすることも、本書の重要な狙いである」(3ページ)。序章では、まず、こうした課題と、「朝鮮人の大量移住とともに水田が東北地域に普及し、生産が急速に伸びていく時期」(3ページ)である1920～30年代における「稲作農業の展開過程を体系的に整理、分析することは、近代中国東北地域史研究、朝鮮人移民の移住史研究、近代日本の対外政策といった分野においても裨益する」(4ページ)という著者の問題意識が提示される。続いて、朝鮮人移民史研究と中国東北地域

史研究の文脈から先行研究が整理され、使用する史料が紹介される。

第1部の3つの章では、東北地域への移民、稲作の展開、朝鮮人移民の土地所有状況・小作関係の3つのテーマを取り上げて、南満・中満・北満間の地域差異に留意しつつ、「朝鮮人移民と水田開発」について検討している。なお、著者によれば、「南満」とは四平街以南の地域であり、「中満」は吉林・長春・公主嶺などの吉林省西南部地域と間島地域、「中満」より北に位置する地域が「北満」である(42ページ)。

第1章では、華北からの漢人<sup>(註2)</sup>移民と朝鮮半島からの朝鮮人移民について考察される。民国初期に東北の地方政府は、土地の払い下げや積極的な移民誘致政策をとる。その結果、1920年代以降華北からの移民が増加し、「関内の人が東北へ移住したピーク期」(28ページ)をむかえた。南満では、荒地がすでにかなり開墾され、人口密度も高くなったのに対し、北満では多くの荒地が残されていたため、1920年代における東北への移民のおもな移住先は北満であった。同時期、朝鮮からの移民も増加していた。華北からの移民が増えた背景には、人口の急増、自然災害、軍閥戦争などの社会背景があった。それに対し、朝鮮からの移民が増加した背景には、土地調査事業と産米増殖計画により、朝鮮人農民の自作・自小作農の土地喪失・貧窮化が急速に進んだことに加え、中国東北における農業の生産環境に対する過剰な宣伝があった。

第2章では、南満、中満、北満にわけて、1910～20年代における稲作の展開を検討する。朝鮮人移民による稲作が最初にみられたのは南満であった。そこでは、朝鮮の在来品種を利用した直播栽培がメインだった。しかし、直播栽培法は修得しやすい粗放的な技術であったため、漢人によって模倣されはじめた。1910年代以降、水田耕作に参入する漢人が多くなった。これは朝鮮人移民が他の地域に再移住する要因となった。南満より寒冷な気候である中満や北満では、小田代、札幌赤毛などの日本の寒冷地域の品種が導入されたことにより、稲作が拡大するようになる。こうした史実を確認した著者は、朝鮮人移民と移住先での農業関係を、松村[1970]の2系列移動説(朝鮮北部の農民は畑作技術を媒体として間島へ、朝鮮南部の農民は稲作技術

を媒体として中・北満へ移動するという松村高夫説)のような単純なロジックだけでは捉えられないという。

第3章では、南満(もっとも早くから開発が行われた地域)、中満(朝鮮人の65パーセントが集中している地域である間島)、北満(開発がもっとも遅れている地域)にわけて、朝鮮人移民の土地所有状況・小作関係が検討される。南満では1920年代半ば頃から小作期間が短縮され、小作関係が非安定的になった。間島の朝鮮人移民の中には小作人が多かったが、間島協約によって朝鮮人移民の土地所有権が保護されるようになり、帰化朝鮮人の名義で地券を獲得することも可能になった。「新開墾地」である北満の小作関係は、小作人に比較的可利なものであった。そのため、南満や間島から北満への再移住、さらには朝鮮の農村部から北満への移住が増えるようになった。

第2部の前半の2つの章では、満州国の米穀政策と移民政策が議論されるが、いずれも失敗するストーリーになっている。

第4章によれば、満州国の米穀政策について、軍用米を現地調達しようとする陸軍省と日本国内の米事情から満州における稲作を抑制しようとする農林省の間には対立があり、こうしたことを背景に満州では米統制が行われる。しかし、実際には、1930年代満州で米が自給できたわけではなく、満州の米需要は、輸入米の供給があつてはじめて満たされた。また、満州における稲作に対し消極的な政策が採られていたにもかかわらず、品種改良が満鉄農事試験場の技師らによって進められ、満州に定着していた朝鮮人移民によって「自主的活動」(朝鮮からの水利技術者招聘)が進められ、米は増産された。

第5章は、満州国の朝鮮人移民政策が、1931～35年の「放任策」から1936～39年「統制策」に変化した時期を扱う。統制策の下においても、朝鮮人移民は急速に増加した。また、1930年代後半以降に進められた集団移民政策により、稲作農業をメインとする朝鮮南部からの朝鮮人農民が急増し、それによって満州の米生産も増加することになった。

第2部後半の2つの章では、朝鮮人移民と農業経営について、北満の2つの村落を事例に考察する。すなわち、第6章では、朝鮮人のみが生活している濱江省珠河県の河東安全農村を、第7章では、朝鮮

人と漢人の雑居村落である北安市海倫県の瑞穂村を事例にしている。

第6章によれば、「安全農村」とは、「満洲事変の勃発によって行き場を失った朝鮮人を収容するために、1933年2月以降、朝鮮総督府が東亜勸業株式会社に委託して、農耕地を獲得して建設させた農場である」(144ページ)。実際、河東安全農村の朝鮮人農民は、朝鮮からの直接移住者ではなく、すでに満洲各地で居住していたが、満洲事変により生活の拠点を失った人々であった。朝鮮人の移住により、水田面積は1933年から1940年にかけて2倍以上になったものの、他方で問題も少なくなかった。例えば、河東安全農村建設にあたり、東亜勸業株式会社による土地の強制的な接収が行われた。これにより、水田農業の経験のない漢人農民は村から追い出されたため、後にこの地域では、漢人農民は朝鮮人農民を敵対視するようになる。また、満洲在住の朝鮮人を自作農化しようとするのが安全農村の設立目的であったが、実際は年賦償還金の重圧のため、自作農化政策は成功できず、村を離れる朝鮮人農民も現れた。

第7章で取り上げる瑞穂村の善牧農場では、水田開発が1929年に始まったが、それにはカトリック教会と漢人有力者の支援があった。当該農場には朝鮮南部からの直接移住者が多く、特に慶尚北道からの移住者が多かったが、これは農場創設者である鄭駿秀の出身地が慶尚北道であったことと深い関連がある。この村には、144戸の朝鮮人農家と143戸の漢人農家が雑居しており、漢人農家のうち67戸は雇農であった。漢人による大規模畑作経営も、朝鮮人による稲作経営も雇用労働力に大きく依存していたが、畑作と稲作の農閑・繁期が異なることから、「労働力における相互依存関係」がみられた。漢人と朝鮮人の共存がみられたところは、第6章との差異でもある。

終章は、まとめの章であるため、割愛する。

## II コメント

本書は、数多くの史料のみならず、現地での聞き取り調査で得た情報も活用している労作である。本書の内容と直接関連する先行研究は、日本ではあまりみられないが、中国・韓国側では多く発表されて

おり〔衣 1999; 金 2003; 2007; 孫 2009〕、実証水準も高い。しかし、中国・韓国側で発表された研究においては、米穀政策といった「日本からの視角」からの検討が不十分であった。本書の第4章は、「日本からの視角」という要素を反映するうえでは重要な章である。高く評価されてよい。

本書のセールスポイントの1つは、満州を、南満・中満・北満と3つの地域に分けて議論を展開していることである。この点について2点コメントしておきたい。まず、こうした地域区分に違和感がないわけではない。例えば、中満に分類されている吉林西部の長春、吉林地区と間島は同一分類でよいだろうか。気候条件を例としてみると、今日的な理解としては、吉林省の内陸部は、日本海が比較的近くにあって長白山により隔離されているため、延辺とは気候条件が異なるといわれている。また、間島における政治環境や朝鮮人移民の集中度などが、吉林西部の地域と異なることは本書の内容からも十分に読み取れる。

次に、残念なことは、前半の議論とは違って、後半では北満に議論を絞ってしまったことである。序章において南満・中満・北満と3つの地域に分けて議論を進めることを「宣言」したからには、後半においても3つの地域に分けて議論することが望ましかった。例えば、安全農村は北満以外に南満にもあったし、三源浦安全農村は中満に分類し、南満・中満・北満における安全農村のあり方について比較検討することも可能である。また、朝鮮人と漢人の雑居農村も北満にしか存在しなかったものではないので、3つの地域を比較しながら議論を進めることが可能である。こうした残された課題については、著者の次の作品に期待したい。

(注1)「満洲」、「満州」、「満洲国」、「満州国」、「間島」いずれも歴史用語であるが、以下、煩雑を避けるためカッコを省略する。

(注2)「漢人」という用語は、本書で使われている用語である。

文献リスト

<日本語文献>

- 松村高夫 1970. 「日本帝国主義下における『満州』への朝鮮人移動について」『三田学会雑誌』63 (6).  
山本裕 2008. 「満州」日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社.

<中国語文献>

- 衣保中 1999. 『朝鮮移民与東北地区水田開発』長春出版社.

- 金穎 2007. 『近代東北地区水田農業発達史研究』中国社会科学出版社.

- 孫春日 2009. 『中国朝鮮族移民史』中華書房.

<朝鮮語文献>

- 金穎 (김영) 2003. 『近代満洲稲作発展と移住朝鮮人』(近代 満洲 벼농사 발달과 移住 朝鮮人) ソウル大学博士論文 (中国語書籍金 [2007] としても刊行されている).

(首都大学東京大学院社会科学研究所科助教)